

コンスタンティノープルと聖遺物：
「エデッサの聖像」到来式典(944年)をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院文学研究科： 都市文化研究センター 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): コンスタンティノープル, ビザンツ帝国, 聖遺物, エデッサの聖像, 王朝 キーワード (En): Constantinople, Byzantine Empire, relics, Image of Edessa, dynasty 作成者: 井上, 浩一 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20171213-176

コンスタンティノープルと聖遺物

—— 「エデッサの聖像」到来式典（944年）をめぐって ——

井 上 浩 一

要 旨

944年8月、ロマノス1世が展開してきた東方遠征のもっとも重要な戦利品として、イエス・キリストゆかりの聖遺物「エデッサの聖像」が、ビザンツ帝国の都コンスタンティノープルに運び込まれた。篡奪皇帝であったロマノス1世は、外敵の退散やみずからの病治癒に加えて、本来の皇帝であるコンスタンティノス7世に対する不法行為の浄化を、この聖遺物がもたらしてくれることを期待していた。しかし、わずか4ヶ月後の同年12月に政変が起こり、ロマノスは失脚する。帝位に戻ったコンスタンティノス7世は、前皇帝が入手した「エデッサの聖像」をみずからの帝位の正統化に転用すべく、宮廷の知識人を動員して、「エデッサの聖像」の獲得の経過や都での到来式典について、歴史の書き換えを行なった。その際に、この聖遺物を都市コンスタンティノープルの守護者とみなしたことが注目される。「エデッサの聖像」を都の守護者としたことは、開祖バシレイオス1世以来マケドニア王朝が展開してきた、王朝の正統性を、この都を開いたコンスタンティヌス大帝とのつながりに求めようという政策の一環であった。「エデッサの聖像」は、都市コンスタンティノープルを媒介として、ビザンツ帝国の皇帝政治と深く結びつけられたのである。

キーワード：コンスタンティノープル、ビザンツ帝国、聖遺物、エデッサの聖像、王朝

(2005年10月5日論文受理, 2005年12月2日採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

はじめに

1) 「エデッサの聖像」

ビザンツ帝国の都コンスタンティノープルは西欧人の憧れの町であった。第4回十字軍の兵士たちはこの町を前にして、興奮のあまり震えを禁じられなかったという。とりわけ彼らの夢をかきたてたのは、各教会・修道院・宮殿に納められているさまざまの聖遺物であった¹⁾。

聖遺物とは、ギリシア語で*leipsana*、ラテン語で*reliquiae*、すなわち「残されたもの」という意味で、もともとはキリスト教迫害時代の

殉教者の遺体を指す言葉であった。のちにはさまざまの聖人、さらにはキリストやマリアにゆかりの品も聖遺物とされ、信仰の対象となった。イコン崇拜が盛んであったビザンツにおいては、西欧ほど聖遺物崇拜は盛んではなかった。とはいえ、キリスト教帝国の都にふさわしいようにと、コンスタンティノープルには歴代皇帝によって聖遺物が集められた。

都への聖遺物の遷座に際しては盛大な到来式典が行なわれた。にもかかわらず、到来の具体的な経過に関する記録は乏しく、コンスタンティノープルにあった聖遺物の大半はその由来

も定かではない。そのなかにあつて、同時代の年代記にも記録があり、入手の経緯、到来の日付までよくわかっている聖遺物がある。エデッサ(今日のトルコ東南部の町ウルファ)から運ばれて、944年8月15日にコンスタンティノープルに到着し、翌16日に到来式典が行なわれた「エデッサの聖像」(以下「聖像」)である。

この聖遺物の到来が記録にとどめられた最大の理由は、それ自身の重要性にあつた。「聖像」はイエス・キリストに直接関わる聖遺物だったのである。すでに古代末期より次のような逸話が知られていた²⁾。エデッサのアブガル王は、イエスに手紙を送り、病気を治してほしいと頼んだ。イエスは、一枚の布を顔に当てると、自分の顔が写ったその布を添えて、返事を王に送った。おかげで王の病は全快した。イエスの顔の写った布の伝説は、この他にもさまざまな類型で広く伝わっており、周知のように西欧ではヴェロニカ(聖顔布)伝説と称されている。

2) 先行研究

年代記に記録が残っているにもかかわらず、「聖像」の到来に関する研究はさほど多くない。伝説や奇蹟譚に包まれた聖遺物は、実証を重んじる歴史学の研究対象にはなりにくかったためであろう。概説書・通史はいずれも、10世紀における東方征服の象徴として簡単に触れるのみである。「聖像」が到来した直後に政変が起こり、ロマノス1世(在位920～44年)からコンスタンティノス7世(在位913～59年)へと帝位が移るが、コンスタンティノス7世時代に関するトインビーの大著も、東方征服の戦果としてひとこと言及するにとどまっている。ロマノス1世時代を扱ったランシマンの著書にはやや詳しい考察があるものの、やはりエピソード的な扱いの域を超えていない³⁾。個別論文でも事情はさほど変わらない。キャメロンの一連の研究は、著者が古代末期の専門家であるためか、いずれも「聖像」の到来より由来に詳しい⁴⁾。しばしば引用されるランシマンの古典的な論文も、史料の引用に誤りがみられるなど、今日の日から見れば問題なしとはしない⁵⁾。

1960年に公刊されたワイツマンの論文は、さほど注目されて来なかったが、今日でも重要

である。同論文は、「聖像」を手にするアブガル王を描いた聖カテリーナ修道院所蔵のイコンの分析から、「聖像」が果たした歴史的役割を明らかにした⁶⁾。すなわち、王が病床に臥しているのではなく玉座にあること、さらに王の顔がコンスタンティノス7世に似ていることに注目し、コンスタンティノス7世は自分をアブガル王になぞらえ、この聖遺物を帝位の正統化に用いた、と結論したのである。ただし美術史家ワイツマンは、あくまでも図像の分析が中心で、文献史料には簡単に触れるにとどめている。

文献史料の側から「聖像」の到来を扱ったものとしては、パトラジャンの論文が注目される⁷⁾。彼女はワイツマンの研究には言及していないが、コンスタンティノス7世の帝位の正統化に「聖像」が用いられた、というほぼ同じ結論に達している。それに加えて、到来式典においてコンスタンティノープルという都市の存在が強調されていることにも注目し、簡単ではあるが市民の信仰にも説き及んでいる。

3) 本稿の課題と構成

ワイツマン、パトラジャンの研究を受けて、本稿もまた「聖像」の到来が果たした歴史的な役割を考察する。その際に、以下のような問題点に留意しつつ、章を追って考察したい。

(1)「聖像」の到来に関する基本史料である『シュメオン・ロゴテテース年代記』(以下『ロゴテテース年代記』)や『続テオファネス年代記』は、同時代記録とはいえ、厳密に言えばコンスタンティノス7世時代に編纂されたものである。パトラジャンが文献史料の実証的研究から、同皇帝の帝位の正統化という結論に達したのは、ある意味では当然かもしれない。第1章では、『ロゴテテース年代記』を関連史料と合わせて分析し、同年代記の編集作業について検討する。パトラジャン論文では十分に分析されていないアラブ史料⁸⁾にも目を向け、「聖像」到来の経過をできる限り正確に復元したい。

(2)「聖像」が到来したのはロマノス1世の末年である。従来の研究ではほとんど省みられなかったが⁹⁾、まずロマノス1世にとって「聖像」到来がもった意味を明らかにする必要がある。ロマノス1世の晩年については、政変に伴う歴

史の書き換えがあったためか、なお解明されていない点が少ない。第2章では、ロマノス1世が「聖像」を入手した前後の状況を分析し、同皇帝と「聖像」到来の関係について明らかにする。

(3) ロマノス1世時代に届いた「聖像」が、どのようにしてコンスタンティノス7世の帝位正統化に転用されたのか。第3章では、コンスタンティノス7世の時代における歴史の書き換えについて、史料ジャンルごとに再検討する。その際に、都市コンスタンティノープルの強調というパトラジャンの指摘を、皇帝位の正統性という観点から捉えなおしたい。

(4) コンスタンティノス7世以降「聖像」はどうなったのか。この問題も従来の研究ではほとんど触れられていない。記録が乏しいこともあって、各研究者の考察は、いきなり第4回十字軍による略奪へと移るのである。しかし、ビザンツ帝国において聖遺物が果たした役割を考えるためには、「聖像」に対する沈黙についても検討する必要がある。「おわりに」では、その後の「聖像」について簡単に展望する。

1 「エデッサの聖像」の到来——史料の分析

1) ビザンツ年代記とアラブ史料

「聖像」の到来に関するもっとも重要な史料は、同時代の記録である『ロゴテテース年代記』と『続テオファネス年代記』である。両者の「聖像」到来記事はほぼ同一である。ここでは、両年代記の関係についての細かい議論に立ち入ることはせず、時代的にやや先行する『ロゴテテース年代記』から引用する。

資料1『ロゴテテース年代記』ロマノス1世の章、〔 〕は『続テオファネス年代記』との異同。なお、以下の史料引用中の（ ）は筆者の補足

「キリストの（顔の）刻印が収蔵されているエデッサの町が、ローマ軍に包囲され、大変な窮地に立たされた。この町の住民たちは皇帝ロマノス（1世）に、包囲解除のための交渉の使節を派遣し、キリストの聖なる刻印の引

渡しを申し出た。この好意と引き換えに、彼らは高貴な捕虜たちの釈放と、今後この地がローマ人の軍団によって荒らされないという金印文書の受け取りを求めた。そのことは実行された。聖なる刻印〔+ないしマンデーリオン〕が送られ、コンスタンティノープルに近づくと、パトリキオスでパラコイモメノスのテオファネスが、サガル〔サガロス〕川まで出向き、輝かしい〔+松明と適切な〕敬意、讃美歌合唱とともに、それを受け取った。そして（聖遺物は）8月15日に彼とともに都に入った。ブラケルネにいた皇帝（単数形）はその場でひれ伏してそれを拝んだ。翌日、（聖遺物は）金門の外へ出た。そして皇帝のふたりの息子ステファノスとコンスタンティノス、娘婿のコンスタンティノス（7世）が、総主教のテオフルクトスとともに、恭しくそれを受け取ると、全元老院議員が前を歩き、壮麗な明かりが前へ進んで、聖ソフィア教会まで徒歩で運んで行った。そしてそこで拝礼をしたのち宮殿に運び込んだ。」¹⁰⁾

同時代年代記（年代記の現代史部分）は、宮廷・修道院の日誌等の原史料をもとに、編纂者がまとめた2次資料である¹¹⁾。それゆえに、「聖像」の到来を伝えるこの記事にも、編纂者の手が関わっている可能性が高い。この場合、『続テオファネス年代記』の並行記事との異同がほとんどないこともあって、原史料と編集作業を腑分けすることは難しい。幸い「聖像」の到来についてはアラブ側の記録も残っている。アラブ史料との比較は、ビザンツ年代記記事の歪みを推定する手がかりとなるだろう。

残念ながらアラブ史料の多くは、「聖像」をビザンツ側に引き渡すべきか否かの相談に焦点を当てているので、さほど参考にはならない。参照に値するのは、ビザンツ帝国の状況に関心の深いヤヒュア『歴史』（11世紀）や、シリア人ミカエル『年代記』（12世紀）であろう。少し長くなるが、より詳しいヤヒュア『歴史』を引用する。

資料2 ヤヒュア『歴史』、〔 〕は露訳

「331年(942/43年)に、ギリシア(ビザンツ)軍がアミダに到来し、住民の多数を捕虜にした。続いて彼らはアルゼンを奪い、その地方の大部分を荒らしたのち、ニシピスに近づき、エデッサの住民に聖像(mandil, アラビア語ではタオルの意)を返すよう要求した。……ギリシア人は、エデッサ住民に次のような約束をした。もし彼らが聖像を引き渡すなら、自分たちの手中にあるイスラーム教徒捕虜のうち、彼らの言うだけの数を釈放する。……(エデッサはこの件に関してムッタキー(カリフ、在位940～44年)に相談し、「聖像」の引渡しを決定した。)……ギリシア人たちは聖像を手に入れてコンスタンティノープルへと運んだ。彼らは8月15日火曜日にそこに到着した。その折、ステファノス、その弟で総主教のテオフュラクトスとコンスタンティノス、(すなわち)ローマ皇帝の息子たちが〔ステファノスとその弟、総主教テオフュラクトス、そしてコンスタンティノス、皇帝ロマノスの息子たちが〕(聖像を)先導するために金門へ向かった。帝国のすべての高官は多くの蠟燭を掲げて、(聖像の)前を行進した。続いてそれを聖ソフィア大教会に運び、そこからさらに宮殿へと運んだ。この出来事は、老ロマノス(1世)とレオーンの息子コンスタンティノス(7世)の治世の24年(944年)に生じた。」¹²⁾

ヤヒュアの記事はビザンツ年代記の伝えるところとほぼ一致している。とくに「聖像」の到来については、8月15日に到着、翌16日に金門から入城し、市内を行列したのち、聖ソフィア教会、そして最後に宮殿に納めたと、まったく同じことを伝えている。日付からもわかるように、ビザンツ年代記に基づく記述である。その限りでは独自の史料的価値はない。

しかし、ミカエル『年代記』も含めてアラブ史料では、彼らの関心に従って情報が付加されているのみならず、同じことを記しても、書き方や視点がビザンツ年代記とは微妙に異なっている。ここで注目したいのは以下の2点である。(1)ビザンツの年代記では、「聖像」の引渡しはエデッサ側から提起されたとしているのに対

して、アラブ史料は、「聖像」獲得に向けてのビザンツ帝国ないしロマノス1世の積極的な行動を記している。(2)アラブ史料では、到来式典記事にコンスタンティノス7世の名前が出てこない。なぜこのような違いが生じたのかを考察することを通して、「聖像」到来の実態に迫ってゆこう。

2) ビザンツ年代記の編集作業

ヤヒュアは、ビザンツ軍の征服活動に続けて「聖像」事件を紹介し、ビザンツ側が「聖像」を要求したと述べている。ミカエル『年代記』は、ビザンツ史料に従って、エデッサ側が申し出たと述べてはいるものの、その一方で、ロマノス1世のエデッサ包囲の目的が「聖像」の獲得にあったことも記している¹³⁾。アラブ史料の筋道立った叙述と突き合わせてみると、ビザンツ年代記の編集作業が浮き彫りになる。

『ロゴテテース年代記』や『続テオファネス年代記』は、ビザンツ側から「聖像」引渡しを要求したことには触れず、その結果生じたエデッサ側からの引渡しの申し入れのみを記している。年代記編者は、ロマノス1世が要求したことは知っていたであろうし、皇帝の通告文書の控え(原史料)を見たかもしれない。にもかかわらず記述していないのは、ビザンツ年代記がしばしば用いる「故意の沈黙」という編集作業である。つまり、ロマノス1世の要求を伏せることによって、その功績を曖昧にしようとしているのである。

「聖像」の獲得がロマノス1世の事業であることを曖昧にするため、年代記編者はもうひとつ別の手法を用いている。アラブ史料と比べてみると、ビザンツ年代記の構成には、「聖像」の獲得を、その直前に展開されていたクルクアス将軍の東方作戦と切り離している、という特徴があることがわかる。「聖像」獲得記事は、冒頭の文で遠征に触れてはいるものの、軍事作戦とは別個に記されており、本来なされるはずの「先取り」ないし「遡及」による因果関係の説明はなされていない¹⁴⁾。その結果、ロマノス1世が聖遺物獲得に向けて積極的に取り組んだことは明示されず、エデッサから引き渡されたことのみが強調されるのである。

次に第2の相違点に移る。アラブ史料ではビザンツ皇帝への関心が低いのは当然であろう。たとえば、8月15日にロマノス1世がブラケルネの教会で「聖像」を拝んだことは述べられていない。しかしながら、その点を考慮に入れても、コンスタンティノス7世への言及がないのは注目すべきである。到来式典を詳述しているヤヒユア『歴史』にも言及がない理由は2通り考えられる。(1)参照したビザンツ史料にあったふたりのコンスタンティノス(ロマノス1世の息子と娘婿)を間違えてひとりにまとめてしまった。(2)コンスタンティノス7世は到来式典において重要な役割を果たしていないと判断し、その名前を省略した。後者の場合、何を根拠にそう判断したのか、問題は残るが、引用末尾の年代記事から、コンスタンティノス7世がロマノス1世の息子ではないことは知っていたと思われるので、言及の欠如は無知ないし不注意による混同ではなく、何らかの別系統の史料ないし伝承に基づき、式典では重要な役割を果たしていないと判断したとすべきであろう。

アラブ史料におけるコンスタンティノス7世の扱いは、ビザンツの再編年代記(年代記の過去部分)¹⁵⁾と共通している。944年の「聖像」到来を記している再編年代記としては、『偽シュメオン年代記』(10世紀後半)、『スキュリツェス年代記』(11世紀後半)、『ゾナラス歴史要略』(12世紀半ば)などがある¹⁶⁾。これらの年代記の当該記事は、『ロゴテテース年代記』または『続テオファネス年代記』に基づいており、独自の資料的価値はない。もちろん、元の年代記にない情報が再編年代記に含まれている場合もあるが、「聖像」の到来に関しては、のちほど取り上げる『偽シュメオン年代記』の伝える逸話以外、検討に値する独自記事はない。しかしながら、元の年代記をほぼ忠実に引き写している偽シュメオンは別として、スキュリツェスやゾナラスが、アラブの歴史家と同じく、コンスタンティノス7世の名前を挙げていないことは注目すべきであろう。言い換えれば、コンスタンティノス7世への言及は、彼の治世に編纂された年代記にほぼ限られているのである。

3) 宗教史料と到来式典の実態

「聖像」の到来についてもっとも詳しい記録は『エデッサの聖像物語』(以下『聖像物語』)である¹⁷⁾。表題によると、『聖像物語』はコンスタンティノス7世自身の著作とされる。正確には、『続テオファネス年代記』と同じく、同皇帝を取り巻く宮廷知識人の手になるものであろう¹⁸⁾。『聖像物語』は、アブガル王の病氣治癒にまつわる伝承、544年のペルシア軍のエデッサ包囲の際の奇蹟などを詳しく述べたあと、「聖像」の引渡しとコンスタンティノープルへの移送、そして都での到来式典について記している。パトラジャンら現代の研究者は、「聖像」到来に関する基本史料とみなしているが、『聖像物語』は歴史書の形式で記されているものの、随所に奇蹟譚を含み、神への呼びかけで結ばれる宗教文書であることにまず留意すべきである。

宗教史料としてはその他に、『コンスタンティノープルの教会殉教者暦』(以下『殉教者暦』)の8月16日の項や、聖ソフィア教会の助祭長グレゴリオスの『説教』がある。いずれもコンスタンティノス7世時代のものであるが、前者は『聖像物語』を簡略にしたような記事であり、後者は聖書の引用に満ちていて、具体的な事実にはほとんど関心がない¹⁹⁾。要するに、宗教史料のうち、「聖像」到来の実態に関して検討に値するのは『聖像物語』のみである。

到来式典の経過について、『聖像物語』は年代記とはかなり異なる情報を含んでいる²⁰⁾。「聖像」は8月15日の夜に都の西北ブラケルネに到着、そこで皇帝たちが拝謁した。ここまでは、皇帝を複数形にしていることを除けば、年代記と一致する。『聖像物語』はそのあと、15日の夜に船でいったん宮殿まで運び、ファロスのマリア聖堂に奉納したと述べる。さらに、翌16日には宮殿から再び船に乗せて、都の周囲を航行したのち、城壁の向う側まで行って上陸したという。これらは『聖像物語』独自の記事である。そのあと「聖像」は、金門から入城して市内を巡行し、聖ソフィア教会の祭壇、続いて宮殿の玉座に置かれ、最後にもう一度ファロスのマリア聖堂に納められた。金門以降の経路は再び年代記と一致している。

『聖像物語』の伝える経路は、夜にブラケル

ネから大宮殿まで航行したこと、ファロスの聖堂に2度奉納したことも含めて、かなり不自然であり、そのとおりに行なわれたものとは考えにくい。15日の夜にいったん宮殿に運ばれた、16日に町の沖を巡航したのち城壁の彼方に着岸した、という経路は編者の創作であろう。同系統の史料である『殉教者暦』もそのような複雑な経路は記しておらず、年代記とほぼ同じことを伝えている²¹⁾。のちほど詳しくみるように、『聖像物語』はコンスタンティノス7世の立場から「聖像」到来を解釈しなおした政治的宗教文書であって、奇蹟譚はいうまでもなく、歴史的叙述の部分も到来式典の実態を伝えようというものではない。しかしながら、歴史がどのように書き換えられるかを語る史料としては貴重である。第3章において、その視点から詳しく分析したい。

以上、関係資料を検討した結果、944年8月の「聖像」到来の経過については次のような結論が得られる。式典の式次第は、ほぼ『ロゴテテース年代記』『続テオファネス年代記』に記されているとおりでである。ただし、両年代記には明記されていないものの、「聖像」の獲得はあくまでもロマノス1世の事業であった。アラブ史料のみならず、コンスタンティノス7世を際立たせようとする『聖像物語』や『殉教者暦』も、ロマノス1世が「聖像」の獲得に積極的であったと述べている²²⁾。到来した「聖像」を真っ先に拝礼したのもロマノス1世であった。さらに、正皇帝が欠席した翌日の到来式典において主役を演じたのは、皇帝の息子たちであって、娘婿のコンスタンティノス7世ではなかった。『聖像物語』の記事にもかかわらず、彼はせいぜいのところ脇役に過ぎなかったのである。

次章ではロマノス1世末期の政治情勢を分析し、「聖像」をめぐるロマノス1世、息子たち、コンスタンティノス7世の関係を明らかにしたい。

2 ロマノス1世と「エデッサの聖像」

先にも述べたように、「聖像」が到来したのは、篡奪皇帝ロマノス1世失脚の4ヶ月前であった。そこで本章では、まずロマノス1世の正統性の

問題に触れたあと、続いて同皇帝の晩年の状況について考察を加える。ロマノス1世の治世末期については、先行研究においても多くの疑問が出されているので、関係史料をややていねいに分析することにしよう。そして最後に、ロマノス1世晩年の状況のなかで「聖像」到来がもった意味を明らかにしたい。

1) マケドニア王朝と篡奪皇帝ロマノス1世

「聖像」の到来をめぐる問題を考えるためには、867年のマケドニア王朝成立に遡る必要がある。貧しい農民から共同皇帝にまで栄達したバシレイオスは、この年、自分を取り立ててくれた皇帝ミカエル3世(在位842～67年)を殺して帝位についた。以降200年近く続き、ビザンツ帝国の最盛期を現出するマケドニア王朝の成立である。クーデターで即位したバシレイオス1世(在位867～86年)は、みずからの帝位の正統性を示す必要があった。

そのために、教会の支持確保などさまざまな方策がとられたが、従来の王朝にはみられなかった政策として、コンスタンティヌス1世(大帝、在位306～37年)との結びつきを挙げることができる。869～70年の教会会議において、バシレイオス1世は「新しいコンスタンティヌス」という称号を受けた。同皇帝が都に行なった大規模な建築事業や、ユダヤ人に対する改宗の強制も大帝を意識しての行為であったと思われる²³⁾。

皇帝の墓所もこの関連で注目される²⁴⁾。歴代ビザンツ皇帝は、コンスタンティヌス大帝が建てた聖使徒教会付属霊廟(コンスタンティヌス霊廟)に葬られてきた。ところが、ユスティニアヌス1世(在位527～65年)が同教会に新しい霊廟(ユスティニアヌス霊廟)を建てると、以後の皇帝はそちらに葬られるようになり、コンスタンティヌス霊廟は使われなくなった。300年以上使われなかったコンスタンティヌス霊廟を復活させたのがバシレイオス1世である。これ以降、マケドニア王朝の皇帝たちはコンスタンティヌス大帝と同じ霊廟に眠ることになる。

血塗られた起源をもつマケドニア王朝は、同じく実力で帝位に就いたコンスタンティヌス大帝をモデルとして、大帝との結びつきにみずか

らの帝位の正統性を求めたのである。これらの政策を通じて、同王朝の支配は次第に安定した。ところが、思いがけないところから帝位を篡奪する者が現れた。それがロマノス1世レカペノスである。海軍長官ロマノス・レカペノスは、919年の春に宮殿を抑えると、まずマケドニア王朝の幼帝コンスタンティノス7世の帝位を尊重するという誓約を、宮殿内ファロスの聖マリア教会²⁵⁾で行なった。続いて5月には、娘ヘレネをコンスタンティノス7世と結婚させた。こうして実権を握ったロマノスは、920年12月にみづから正皇帝として即位する。921年5月には、長男クリストフォロス²⁶⁾を第1共同皇帝＝帝位継承者とした。さらに924年12月には、次男ステファノス、三男コンスタンティノスも共同皇帝にする。いうまでもなく、正皇帝となったことは誓約違反であった。

ロマノスはマケドニア王朝から帝位を篡奪したが、先帝を殺害したバシレイオス1世とは異なり、コンスタンティノス7世を帝位にとどめておいた。マケドニア王朝から帝位を完全に奪取できなかったのである。ロマノス1世の微妙な立場をよく示しているのが、ミュレライオン

修道院の設立であろう²⁶⁾。先にも述べたように、マケドニア王朝の皇帝たちは、聖使徒教会のコンスタンティヌス霊廟を墓所としていた。ロマノス1世が即位後まもなく、自分たちレカペノス一族の墓所として都にミュレライオン修道院を設立したことは、マケドニア王朝に対する配慮と思われる。

2) ロマノス1世の晩年

ロマノス1世は、クルクアス將軍を用いて東方のイスラーム世界に対して攻勢に出た。内政においても、台頭しつつあった「有力者」を抑えて、国家の財政・軍事の基礎である小農民の村落共同体の維持をはかった。このあと10世紀後半から11世紀はじめに迎える帝国の最盛期を、内外両面において準備した皇帝といえよう。

ところがその治世末期には一時的に混乱が生じた。各年代記は、競馬場での事故、シャム双生児の出現といった不吉な現象について述べ、それをロマノス1世の失脚——「聖像」の到来から4ヶ月後の944年12月20日、息子たちがクーデターを起こし、ロマノス1世は追放さ

各年代記のロマノス1世末年記事対照表

年 代	事 件	ロゴテテース 年 代 記	続テオファネス 年 代 記	偽シュメオン 年 代 記
941年6～9月	ロシア艦隊のコンスタンティノープル攻撃	323,8-324,19	⇒39章	46章
	クルクアス將軍の活動、將軍の娘の縁談と將軍の解任（先取り）	324,20-325,2 （一部欠落）	⇒40,43章 （独自記事）	—
治世22年？ （942年？）	市民の借金を帳消し 慈善事業、寄進（悔い改め？）	— （319-320が 並行記事か？）	44章 独自記事	— （38章が 並行記事か？）
943年4月	トルコ人（＝マジャール人）の侵入	325,3-325,6	⇒45章 ＋独自記事	47章
943-44年	ロマノス2世婚約 結婚と妻の死（先取り）	325,7-325,14	⇒46章	48章
(943年)12月	競馬場の事故 ロマノス1世失脚（先取り）	325,15-325,21	⇒47章	49章
944年8月	「エデッサの聖像」の到来	325,22-326,19	⇒48章	50章
？	アルメニアのシャム双生児 コンスタンティノス7世単独統治（先取り）	326,20-327,8	⇒49章	51章
	修道士を尊重、セルギオス（悔い改め）、 ロマノス1世失脚	327,9-328,3	⇒50-51章	52章＋独自記事 「聖像」逸話
944年8月？	ロマノス1世の遺言状	—	52章 独自記事	53章
944年12月	息子たちのクーデター	328,4-328,14	⇒53章	53章

れた——と結びつけるという編集作業（先取り）をしている。（前頁の表参照）

対外面では、東方領土の奪回という大きな成果の一方で、941年6月にはロシア艦隊のコンスタンティノープル襲撃事件が起こった²⁷⁾。ようやく9月にビザンツ海軍は、秘密兵器の「ギリシアの火」によってロシア軍を撃退したが、再び943～44年にロシア人はコンスタンティノープル攻撃の態勢を整えた。ビザンツは多額の贈り物をして、辛うじて攻撃を思いとどませたという²⁸⁾。相前後してマジヤール人の大規模な侵入も生じた（943年4月）。

国内の問題もあった。870年頃の生まれと推定されるロマノスは、即位時すでに50歳、940年代には70代であった。皇帝の健康が優れなくなるとともに帝位継承問題が表面化した。ロマノスがあと継ぎに予定していた長男クリストフォロスは、父より先に死に、ミュレライオン修道院に葬られていた。あとに3人の共同皇帝——ふたりの息子と娘婿のコンスタンティノス7世——が残されたが、ロマノスが誰を跡継ぎと考えていたのかは、政変後に編纂された年代記では事実が伏せられている可能性もあり、よくわかっていない²⁹⁾。以下、やや細かく検討したい。

『続テオファネス年代記』6巻44章（942年頃）は、ロマノス1世の慈善事業を列挙している。ただし、これらの事業がすべてこの時期に行なわれたものか、それとも編者が一連の事業をまとめて記したのかは、『ロゴテテース年代記』に並行記事が欠けているので断言できない³⁰⁾。12世紀の『ゾナラス歴史要略』は、慈善事業の動機を、帝位篡奪を後悔したためだと述べている³¹⁾。ロマノス1世は治世末に至って悔い改め、コンスタンティノス7世に帝位を戻そうとした、とゾナラスは考えているようであるが、その根拠は明らかではない。

先にみたように、『ロゴテテース年代記』の「聖像」到来記事では、コンスタンティノス7世はロマノス1世のふたりの息子のあとに挙げられている。コンスタンティノス7世の宮廷で編纂された『続テオファネス年代記』でも同一の序列である。同皇帝の立場から書かれた『聖像物語』や『殉教者暦』が、この箇所を「若い皇帝

たち」と表現している³²⁾のも、式典の経過を記した原史料がロマノス1世の息子たちを先に挙げていたことを示している。もしもコンスタンティノス7世が第1共同皇帝であれば、式典の席次もそれに従って定められ、記録にも同皇帝の名が先に記されたであろう。そうでなかったからこそ、3人の共同皇帝の序列を曖昧にするような「若い皇帝たち」という表現がなされたのである。以上から、「聖像」到来式典の時点（944年8月）では、第1共同皇帝＝帝位継承予定者は、ロマノスの次男ステファノスであったと判断できる。

しかるに同年12月には息子たちが父ロマノスにクーデターを起こしている。8月から12月のあいだに帝位継承予定者の変更、ないし変更計画があったと考えるべきであろう。この点に関して検討を要するのは、晩年のロマノス1世をめぐるふたつの問題である。

3) クルクアス将軍の解任とロマノス1世の遺言状

ひとつは、東方遠征に功績のあったクルクアス将軍の解任である。ロマノス1世は、クルクアスの娘と自分の孫ロマノスとの縁談を進めたが、皇帝たちから反対が生じ、結局クルクアスは解任され、代わってレカペノス一族のパンテリオスが司令長官となった³³⁾。この事件を伝える史料にはかなりの混乱がある。『ロゴテテース年代記』のもっとも重要な写本（レオン・グラマティコス写本）では記事の一部が欠落している。他方『続テオファネス年代記』は、あいだに長い独自記事を挟んで、40章と43章に分割して記している（表参照）。その際に、同じ文章を繰り返すなど、編集作業の不手際が目立つ。さらに、両年代記ともこの孫ロマノスをロマノス1世の息子コンスタンティノス（共同皇帝）の子としているが、『ロゴテテース年代記』の1写本（スラヴ写本）は、縁談の相手は娘婿コンスタンティノス（7世）の息子ロマノス（のちの同2世、939年生まれ）と記している。ランシマンはスラヴ写本の読みを採用しており、トレッドゴールドの概説書もそれに従っている³⁴⁾。

このように写本にまで及ぶ問題を含む記事ではあるが、さしあたり次の点を確認しておきた

い。各年代記には、続いてロマノス2世の結婚が記されているので(表参照)、縁談の相手はロマノス2世と考えるべきである。年代記の編集作業のため、いつの時点か確定は難しいが、病のロマノス1世はコンスタンティノス7世への譲位を考え、もっとも信頼する将軍クルクアスを後見人に指名した。これに対して反発があり、この縁談がとりやめとなったばかりか、将軍が更迭されるという結果となった。反対したのが「皇帝たち」であったとされること、レカペノス一族から新司令長官が選ばれたことを合わせて考えると、ロマノス1世の意向に対して息子たち(共同皇帝)が反発したと思われる。ライバルの義兄コンスタンティノス7世に有力な後ろ盾をつくことを嫌ったのであろう。

もうひとつの問題は、『続テオファネス年代記』のみが伝えるロマノス1世の遺言状である。

資料3 『続テオファネス年代記』6巻52章

「皇帝ロマノスは老齢と病に悩まされ、遺言状で帝国のことを正確に決めて、6453年(943年9月～944年8月)に遺言状で、緋色の生まれのコンスタンティノスを第1の支配者、続いて彼の息子たちを第2、第3と定めた。彼ら(彼の息子たち)については、もし第1皇帝に危害を加えるならば、ただちに帝位から除外されるということをはっきりと確認した。」³⁵⁾

この記事は「聖像」到来の少しあと、かつロマノス1世の失脚の直前に置かれている(表参照)。もし日付・内容が記述のとおりなら、ロマノスは944年8月に正式にコンスタンティノス7世を後継者としたということになる。ただし『ロゴテテース年代記』には並行記事がなく、『続テオファネス年代記』でもこの記事を含まない写本が多い。しかも同年代記第6巻としては例外的に世界年代が記されていたり、「遺言状」という言葉が繰り返されるという不自然な点もある。また「彼の息子たち」という語句は、文法的にはコンスタンティノス7世の息子を指すが、幼い息子が父に危害を加えるとは考えられない。明らかに「自分(=ロマノス1世)の息子たち」とあるべきところである。以上の点から、

この記事が年代記の原本にあったとは考えにくい。おそらく、転写の過程で挿入されたものと思われる³⁶⁾。

しかしながら遺言状自体を後世の偽造と考えるべきではない。先に推定したように、944年8月の到来式典と12月のクーデターの間、帝位継承者がロマノスの息子からコンスタンティノス7世に変えられたようである。遺言状はその推定とよく合致している。年代記への挿入に不手際があつて、「遺言状で」が繰り返されたり、「彼の息子たち」が指す人物に狂いが生じたが、遺言状自体は本物であろう。944年8月付の原本を要約して挿入したと思われる。ロマノス1世はコンスタンティノス7世への譲位を考えていた、と言わんがための挿入であろう。それがロマノス1世の免罪のためか、コンスタンティノス7世の帝位の正統化のためかは、俄かには判断しがたい。なお『偽シュメオン年代記』は、『ロゴテテース年代記』をほぼ引き写しつつも、遺言状については『続テオファネス年代記』の記事を採用し、それがロマノス1世の息子たちのクーデターの原因であったと述べている³⁷⁾。実情をほぼ正確に伝えるものと思われる。

4) 小 括

本章の最後に、ロマノス1世の晩年の状況をまとめ、同皇帝にとって「聖像」の到来がもつた意味を確認しておきたい。

対外危機、とくに病の悪化とともに、晩年のロマノス1世は帝位の篡奪、誓約違反を悔いるようになった。自分のあとはマケドニア王朝に帝位を戻す気になったようである。しかしながら、文弱のコンスタンティノス7世のためクルクアス将軍を後見人としようとしたところ、息子たち——父の病とともに実権を握りつつあった——が反発して、結局、クルクアス将軍は解任されることになった。

父子の対立も含む政治的混乱のなか、病の老皇帝は最後の決断を「聖像」に求めようとした。第1章で確認したように、「聖像」の獲得はロマノス1世の事業であったが、ロマノスが「聖像」に求めたのは、異教徒に対する勝利を誇示することよりも、アブガル王のような病治癒であった。さらにそれに加えて、篡奪行為の浄化

も願っていたと思われる。「聖像」をファロスのマリア聖堂に納めたのは、同聖堂で行なったコンスタンティノス7世に対する誓約を念頭においてのことに違いない。

944年8月15日夜、「聖像」が到来すると、ロマノスは真っ先にそれを拝んだ。しかし奇蹟は起こらなかった。翌日の到来式典に出席できなかったことがそれを語っている。失意のロマノスは最後の決断をした。コンスタンティノス7世にあとを継がせるといふ遺言状の作成である。罪が赦されるのはそれしかないと考えたのであろう。息子たちは遺言状を知って、父を除くことを決意した。

3 コンスタンティノス7世の再登極と「エデッサの聖像」

1) 帝位の正統化と歴史の書き換え

父ロマノス1世の命は長くない、このままでは帝位はコンスタンティノス7世に渡るだろうと考えた息子たちは、944年12月20日にクーデターを敢行、父を捕らえて修道院に入れた。続いてコンスタンティノス7世も除くつもりであったが、市民の間では同皇帝の人气が高く、実行に移せなかった。ロマノス追放の報せが伝わると、群集が宮殿に殺到し「コンスタンティノス」と叫んだと、クレモナ司教リウトプラントは伝えている³⁸⁾。マケドニア王朝に対する市民の親近感を示す事件である。かつてロマノス1世がコンスタンティノス7世を共同皇帝にとどめたのも、このような市民の声を無視できなかったためであろう。

残った共同皇帝のうち誰が正皇帝になるか、緊迫した状況のなか、先手を打ったのはコンスタンティノス7世側であった。945年1月27日、レカペノス家の兄弟を逮捕し、宮廷から追放した。こうして、20数年ぶりにコンスタンティノス7世は正皇帝の地位に戻った。しかしその帝位は不安定であった。「聖像」の受け取りに向かいテオファネスをはじめ、レカペノス派の勢力がなお残っていたからである。事実、このあと彼らによる陰謀事件が生じている³⁹⁾。コンスタンティノス7世は改めて帝位の正統性を

示す必要に迫られていた。

帝位の正統性はさまざまな方法で主張された。まず注目すべきは「緋色の生まれ」の強調である。在位中の皇帝に生まれた子供を、皇后が宮殿の緋色の間で出産することにちなんで、「緋色の生まれ」と呼ぶ慣例が早くからあったが、この言葉を皇帝の称号として用いたのはコンスタンティノス7世が最初である⁴⁰⁾。成り上がりのレカペノス一族との差別化をはかるためであろう。

さらに、王朝成立の直後から展開されていたコンスタンティヌス大帝との結びつきが、この時期にはいっそう強調されるようになった。バシレイオス1世の母方はコンスタンティヌス大帝に遡るといふ、どの王朝にも先例のない主張がなされるに至ったのである。この主張はかなり広まっていたようで、リウトプラントのような外国人の耳にも届くほどであった。マケドニア王朝の「コンスタンティヌス神話」はここに完成したといつてよいだろう⁴¹⁾。

「聖像」もまた帝位の正統化に用いられた。この点についてはすでにワイツマン、パトラジャンの先行研究が明らかにしているので、本稿では史料類型ごとに、どのように歴史を書き換えたかを確認したあと、おもに都市コンスタンティノープルの問題について考察したい。

第1章でみたように、コンスタンティノス7世時代に編纂された同時年代記は、ビザンツ年代記特有の編集作業を通じて、「聖像」の獲得がロマノス1世の事業であったことを曖昧にしている。しかしながら、編集作業による歴史の書き換えには限界があった。コンスタンティノス7世の役割を強調したくとも、歴史書である限り原史料を改竄することはできず、ロマノス1世がまず聖像を拝んだと記し、翌日の行列についても、コンスタンティノス7世の名はロマノス1世の息子たちのあとに記さざるを得なかったのである。

再編年代記の場合は事情が少し異なる。『偽シュメオン年代記』以降の各年代記の「聖像」記事は、『ロゴテテース年代記』ないし『続テオファネス年代記』をもとにしつつ、編者の判断で適宜文章に手を加えたものである。繰り返すまでもなく、到来式典の事実経過に関しては

史料的价值はない。ところが『偽シュメオン年代記』にはひとつだけ、『ロゴテテース年代記』にも『続テオファネス年代記』にもない独自記事が含まれている。それは「聖像」が届いた時、コンスタンティノス7世だけがキリストの顔を見分けたという話である⁴²⁾。もちろん事実とは考えられない。しかし、そのような逸話が広がっていたことは『ラトロスの小パウロス伝』⁴³⁾からも窺え、コンスタンティノス7世こそが正統な皇帝であるという主張が、「聖像」を用いて展開されていたことを語っている。『偽シュメオン年代記』の編者は、コンスタンティノス7世ないしマケドニア王朝の立場から、この逸話を採録したのである。ただし、本来の到来記事ではなく、修道士セルギオスに関する記事に挿入したのは、歴史家としての倫理観のなせる業であろうか。

年代記の編纂や逸話の流布によって、コンスタンティノス7世の宮廷では、「聖像」の到来を同皇帝と結び付けようとする努力がなされた。それを全面的に行なったのが『聖像物語』の編纂である。コンスタンティノス7世の著作とされるこの作品は、年代記では十分にできなかった同皇帝讃美を、宗教文書という形式で謳いあげている。『聖像物語』は、ロマノス1世が獲得した「聖像」を、コンスタンティノス7世の帝位の正統化に転用した。その手法として注目されるのは、宗教作品の特徴を生かした奇跡譚や祈りの言葉、さらには巧みな言い換えでもって、到来式典の主角をコンスタンティノス7世に変えることである。それぞれ典型的な例を挙げておこう。

(1) 聖遺物がコンスタンティノープルへ向かう途中のこととして、『聖像物語』には次のような奇蹟物語が記されている。

資料4 『エデッサの聖像物語』27章

「彼（悪霊に取り付かれた男）は、……次のようなことを（言った）。『コンスタンティノープル、汝は名誉と喜びを受け取れ！、そして汝、緋色の生まれのコンスタンティノス（7世）よ、汝は自分の帝国を！』このことが言われると、その男は癒された。」⁴⁴⁾

『殉教者暦』にも記されているこの逸話は、いうまでもなく、コンスタンティノス7世の正統性を弁証しようというものである。同皇帝が「緋色の生まれ」と呼ばれていることにも注目しておこう。

(2) 最終31章は「聖像」への祈りである。そこには次のように記されている。

資料5 『エデッサの聖像物語』31章

「変わることなき父の似姿である聖なる像よ。……我らを敬虔に情け深く（皇帝として）支配する者、そしてあなたの到来の思い出を盛大に祝う者を救い、守りたまえ。あなたの存在によって、その父の、そして祖父の玉座へとあなたがお上げになられた者を。彼の子供たちを子孫代々守り、支配を永遠に続けさせたまえ。」⁴⁵⁾

「（皇帝として）支配する者」は単数形であり、その父も祖父も皇帝であった。すなわち、「聖像」の到来を今祝っている者とはコンスタンティノス7世に他ならない。「緋色の生まれ」という表現こそ用いられないが、ここでもマケドニア王朝の血統が強調されている。

(3) 『聖像物語』の「聖像」到来記事は、巧みな表現でロマノス1世の役割を曖昧にし、年代記と矛盾しない範囲で、できる限りコンスタンティノス7世を前面に出そうとしている⁴⁶⁾。たとえば年代記では、ロマノス1世が真っ先に「聖像」に拝礼したとあるところを、『聖像物語』は「皇帝たち」が拝礼したと表現している。コンスタンティノス7世を含める意図であろう。ロマノス1世が16日の到来式典に参加しなかったこと——これは事実である——をわざわざ強調し、しかもその際にロマノスという名前は用いず、「老人」と呼んでいる。式典の参加者を「若い皇帝たち」と表現するのも、ロマノスの息子たちがコンスタンティノス7世より上席を占めたことを伏せるためであった。

2) 『聖像物語』とコンスタンティノープル

先行研究の紹介の際に述べたように、主として『聖像物語』によりつつ到来式典の分析を行なったパトラジャンは、都コンスタンティノープル

プルがもう一方の主演であると説いた。確かに『ロゴテテース年代記』と『聖像物語』を比較すると、コンスタンティノス7世に加えて、都市コンスタンティノープルへの言及という点でも大きな相違がみられる。年代記がまったく触れていないのに対して、『聖像物語』では繰り返し都市コンスタンティノープルへの言及がなされるのである。まず史料に即して実例を挙げておこう。

(1) 『聖像物語』の表題は、この著作の主題が「聖像」のコンスタンティノープル到来であることを示している。第1章でも、聖遺物はコンスタンティノープルに集められるべきことが強調され、「聖像」はこの町を守るためにエデッサから移された、とも述べられる⁴⁷⁾。

(2) 27章の奇蹟譚では、悪霊にとりつかれた男が「コンスタンティノスよ、汝は帝国を受け取れ」と叫んだが、その男は対句として「コンスタンティノープル、汝は名誉と喜びを受け取れ」と叫んでいる(史料4参照)。

(3) 28章から30章にかけての到来式典についても、『聖像物語』は「聖像」がコンスタンティノープルの町を守ることを繰り返し強調している。「聖遺物が町を守ってくれるように」と、船に乗せて都の周囲を航行したという記事は、上述のように年代記には記されておらず、行程からも事実とは考えにくい。941年のロシア艦隊の攻撃を念頭においた創作であろう。『聖像物語』によればその他に、金門から聖ソフィア教会まで市内を行列したのも、ファロスのマリア聖堂に納められたのも、都の安全のためだとされる⁴⁸⁾。

(4) 結びの「聖像」への呼びかけでも、コンスタンティノス7世とその子孫に加えて、「諸都市の女王(コンスタンティノープル)を守りたまえ」⁴⁹⁾という表現がみられる。

こうして『聖像物語』では、「聖像」の奇蹟能力は病気治癒から、帝都の守護へと力点を移していることがわかる。このような都市コンスタンティノープルの強調は何を意味するのであろうか。それを考える手がかりは『偽シメオン年代記』に窺える。コンスタンティノス7世の正統性を語る逸話を挿入した同年代記は、「聖像」の市内行列についても、元の『ロゴテ

テース年代記』とは微妙に異なる書き方をしている。行列した人々として、『ロゴテテース年代記』にはない「laos(群衆・兵士)」という言葉が挿入しているのである⁵⁰⁾。この場合laosとは首都市民を指すものと思われるが、944年12月のクーデターの際に、市民がコンスタンティノス7世を支持したことを考え合わせれば、『偽シメオン年代記』における市民への言及は、キリストの顔を見分けた逸話と同じく、同皇帝の正統性を主張するためであろう。コンスタンティノープル市民の支持が帝位の正統性を保証する、というわけである。

『聖像物語』における都市コンスタンティノープルへの言及もまた、コンスタンティノス7世ないしマケドニア王朝の正統化と結びついているように思われる。先にみたように、マケドニア王朝の開祖バシレイオス1世は、コンスタンティヌス大帝とのつながりを強調する一方で、コンスタンティノープルの都市整備に努めた。「新しいコンスタンティヌス」とは、大帝の名にちなんだ都の再建者に他ならなかったのである。バシレイオス1世の大規模な建築事業によって、コンスタンティノープルはかつての輝きを取り戻した。帝都を飾ることは、帝位正統化の手段として有効に機能したようである。だからこそ『続テオフィアネス年代記』は、同皇帝の建築事業について詳しく記すのであろう⁵¹⁾。

都コンスタンティノープルの重視はマケドニア王朝の伝統となつてゆく。マグダリーノも述べているように⁵²⁾、コンスタンティノープルに関するまとまった記録は10世紀前半に集中しており、しかもその多くは皇帝、とくにコンスタンティノス7世と関係が深い。『市総督の書』『儀式の書』はそれぞれレオン6世(在位886～912年)、コンスタンティノス7世の著作とされる。後者の秘書官であったロードスのコンスタンティノス『描写』や著者不明の『聖ソフィア教会の規約』も皇帝と関係の深い著作であり、本稿で取り上げた『コンスタンティノープル教会殉教者暦』もコンスタンティノス7世の宮廷でまとめられたものである。この時期の皇帝政府がコンスタンティノープルに強い関心を寄せていたことがわかる。

コンスタンティノス7世の宮廷知識人たち

が、『聖像物語』において帝都コンスタンティノープルの守護を強調したのも、コンスタンティヌス大帝との結びつきに帝位の正統性を求めるという、マケドニア王朝の政策を反映したものであった。そこに展開されるのは、皇帝とは都コンスタンティノープルを輝かせる者であり、その市民たちに支えられる存在、という理念である。都コンスタンティノープルは、従来から帝国国制のうえで特殊な地位を占めていたが、今や皇帝権そのものと融合するに至った。

マケドニア王朝が体現したこの理念を、ビザンツ帝国史の流れのなかにおくなら、次のように言えるだろう。ユスティニアヌス1世時代の繁栄ののち、7世紀になると異民族の侵入に伴う混乱のなかで、帝都コンスタンティノープルも荒廃を余儀なくされた。その結果、7世紀末から8世紀は、テマ（地方軍管区）が帝国政治において主導的な役割を果たす時代となった。820年代初の大規模なテマ反乱ののち、ようやく皇帝政府は地方のテマを抑えて中央集権化を推進してゆく。それは同時に、コンスタンティノープルがかつての繁栄を回復してゆく過程でもあった。この過程はマケドニア王朝のもので完成する⁵³⁾。すべての聖遺物はこの町に集められなければならないという『聖像物語』の言葉は、このような都コンスタンティノープルの地位を、宗教面から語るものである。

おわりに

本稿では、944年8月にコンスタンティノープルにもたらされた「聖像」が、ロマノス1世末年からコンスタンティヌス7世の治世にかけて、帝国政治のなかでどのように機能したのかを検討した。最後に、「聖像」のその後の歴史を簡単にたどるとともに、今後の課題を示しておこう。

1) 「聖像」のその後

944年8月以降の「聖像」に関するビザンツ人の記録はきわめて乏しい。レオン・ディアコノス『歴史』は、968年にニケフォロス2世（在位963～69年）がエデッサに入城し、キリスト

の顔が写った瓦を獲得したことを伝えている⁵⁴⁾。その際にレオンは、アブガル王に届けられた聖顔布からさらに瓦にキリストの顔が転写されたが、元の布は弟子タダイが持ち帰った、という別系統のヴェロニカ伝説を記しており、24年前にコンスタンティノープルへ運ばれた「聖像」については何も述べていない。1032年のマニアクス將軍によるエデッサ占領に関しても、『スキュリツェス年代記』はキリストの手紙の獲得を記すのみで、かつてこの町にあった「聖像」には触れていない⁵⁵⁾。

いったん宮殿に納められた聖遺物は、外国の賓客に見せることはあっても、一般にはめったに公開されなかった。記録が少ないのはそのためであろう。しかしながら、「聖像」の場合、理由はそれだけではないと思われる。ここでも「故意の沈黙」が想定されるべきである。レオンもスキュリツェスも「聖像」の遷座を知らなかったはずはない。承知のうえで、沈黙しているのである。管見の限りでは「聖像」に直接言及しているのは、『スキュリツェス年代記』の記事2件のみである。ひとつは1034年、地方で不穏な動きを示した貴族ダラセノスを都へ召還する際に、身柄の安全を保証するため、他の聖遺物とともに「聖像」が彼のもとへ届けられたという話である。もうひとつは1037年の渇水の際に、雨乞いの行列が「聖像」を担いで都大路を練り歩いたという記事である⁵⁶⁾。注目すべきは、どちらの場合も「聖像」は聖遺物としての機能を発揮しなかったことである。ダラセノスは上京後まもなく逮捕されたし、雨は降らなかった。

このような無視ないし冷ややかな態度は何を意味するのだろうか。レオンの『歴史』は、ロマノス1世と同じく、マケドニア王朝から一時的に帝位を篡奪したニケフォロス2世に近い立場から書かれている。また『スキュリツェス年代記』は同王朝の断絶後に編纂されたものである。これらの史書における「聖像」の扱いは、編著者の政治的立場を反映したものと思われる。確かにキリストに関わる重要な聖遺物ではあったが、あまりにも特定の王朝、ひとりの皇帝と強く結び付けられた「聖像」は、扱いにくい代物だったに違いない。第1章でみたように、

再編年代記の「聖像」到来記事がコンスタンティノス7世に触れないのも、同じ理由によるものであろう。

2) 今後の課題

「聖像」の遷座と相前後して、聖母のイコンが、やはり帝都の守護者としての名声を高めつつあった。コンスタンティノープルのマリア伝説としてもっとも有名なのは、626年アヴァール人に包囲された時に、総主教が聖母のイコンを持って城壁の上を巡ったという逸話であろう。しかしながら、これは歴史的事実ではなく、10世紀後半に成立した虚構である⁵⁷⁾。これもまた、都市コンスタンティノープルが神に守られた特別な町であるという、マケドニア王朝のもとでの帝都観念の表現と考えられる。と同時に、聖母マリアのイコン伝説の広まりは、「聖像」への関心の低下を招く要因となったかもしれない。マケドニア王朝から一時帝位を篡奪したヨハネス1世(在位969～76年)が、凱旋式などで聖母のイコンを用いたこと⁵⁸⁾なども、両者が帝都の守護者として競合関係にあったことを示唆しているが、コンスタンティノープル市民の奇蹟信仰におけるイコンと聖遺物の関係については、今後の課題とせざるを得ない。

王朝との関係が変化すると、「聖像」は帝国政治には登場しなくなった。当然、史料にも現われなくなる。ただし、歴史書には言及されなくても、市民のあいだには聖顔布信仰が広がっていたと思われる。ワイツマンは、聖カテリーナ修道院蔵のアブガル王のイコンを、宮廷で制作されたイコンの粗雑な模造品であるとみなしている⁵⁹⁾。このことは、聖顔布像が一般にも広まっていたことを示唆するものであろう。それを明らかにするためには、聖顔布画像の残存状況について、さらなる検討が必要なことはいうまでもない⁶⁰⁾。また、外国人の記録には、このあとも「聖像」への言及が散見される⁶¹⁾。聖遺物の都という対外的なイメージの形成には「聖像」も与っていたようである。市民や外国人が、「聖像」とコンスタンティノープルを具体的にどのように結び付けていたのか。この問題も今後の課題としたい。

注

1. 有名なヴィラルドゥアンやロベール・ド・クラリの征服記録の他、注目されるのはペリのグンテルス『コンスタンティノープル史』で、第24章をそっくり聖遺物のリストに充てている。*Gunther von Pairis, Hystoria Constantinopolitana, Untersuchungen und kritische Ausgabe*, ed., P. Orth, Hildesheim, 1994.
2. アブガル王の伝承については、A. Cameron, “The History of the Image of Edessa: The Telling of a Story,” *Harvard Ukrainian Studies*, 12-13 (1988/89), pp.80-94. や E. Balicka-Witakowska, “The Holy Face of Edessa on the Frame of the Volto Santa of Genoa: The Literary and Pictorial Sources,” in J. O. Rosenqvist (ed.), *Interaction and Isolation in Late Byzantine Culture*, Stockholm, 2004, pp.100-132. などが手際よく整理している。
3. A. Toynbee, *Constantine Porphyrogenitus and His World*, Oxford, 1973, p.319; S. Runciman, *The Emperor Romanus Lecapenus and His Reign*, Cambridge, 1963, pp.229-230.
4. Cameron, op. cit.; Idem., “The mandylion and Byzantine Iconoclasm,” in H. Kessler & G. Wolf (eds), *The Holy Face and the Paradox of Representation*, Bologna, 1998, pp.33-54.
5. S. Runciman, “Some Remarks on the Image of Edessa,” *Cambridge Historical Journal*, 3 (1931), pp.238-252.
6. K. Weitzmann, “The Mandylion and Constantine Porphyrogenitus,” *Cahiers Archéologiques*, 11 (1960), pp.163-184. 図版は、木村重信他編『光は東方より』講談社、1994年、124ページ。ただし126ページの解説は、「聖像」の到来を誤ってコンスタンティノス7世時代としている。
7. E. Patlagean, “L’entrée de la Sainte Face d’Édesse à Constantinople en 944,” in A. Vauche (ed.), *La religion civique à l’époque médiévale et moderne (Chrétienté et Islam)*,

- Paris, 1995, pp.21-35.
8. A. A. Vasiliev, *Byzance et les Arabes*, vol. II-1, Bruxelles, 1968, pp.295-306. 参照。
 9. ロmanos1世との関係を扱っていると思われるエンクベルクの論文 (S. G. Engberg, "Romanos Lekapenos and the Mandilion of Edessa," in B. Flusin (ed.), *Les reliques de la Passion.*) はなお未刊行である。Cf. Balicka-Witakowska, op. cit., p.106, no.28.
 10. Leon Grammatikos, *Chronographia*, ed., I. Bekker, Bonn, 1842, pp.325-326. 『ロゴテテース年代記』の引用は、とくに必要がない限りレオン・グラマティコス版の刊本から行ない、続ゲオルギオス版は参考にとどめた。Georgios continuatus, *Chronographia*, ed., I. Bekker, Bonn, 1838. 『続テオファネス年代記』の並行記事はTheophanes continuatus, *Chronographia*, ed., I. Bekker, Bonn, 1838, p.432.
 11. 井上浩一「ビザンツ年代記の編纂過程と史料的价值」『人文研究』第50巻第11分冊, 1998年, 33～73ページ。
 12. ヤヒュアは仏訳と露訳を参照した。 *Histoire de Yahya-ibn-Sa'id d'Antioche*, ed. et trad., J. Kratchkovsky et A. Vasiliev, Patrologia Orientalis. XVIII, Fac. 5. Paris, 1957, pp.730-732; V. R. Rozen, *Imperator Vasilij Bolgarobojce*, St. Peterburg, 1883, pp. 392-396. 仏訳では「ローマ皇帝」とあるが、露訳の「ロmanos皇帝」が正しいと思われる。
 13. シリア人ミカエル『年代記』については仏訳に拠った。 *Michel le Syrian, Chronique*, ed., J.-B. Chabot, 4. vols. Paris, 1899-1924, vol. 3, p.123.
 14. クルクアス将軍の活動については Leon Grammatikos, p.318, 324; *Theophanes continuatus*, pp.426. 『続テオファネス年代記』にはクルクアス家に関する長い独自記事があるが、軍事活動については簡単な言及のみである。「先取り」「遡及」という編集方法については井上前掲論文, 36～37ページ。
 15. 再編年代記については同論文, 36～37, 39～40ページ。
 16. Symeon Magister, *Chronographia*, ed., I. Bekker, Bonn, 1838, pp.748-749; *Ioannis Scylitzae Synopsis Historiarum*, ed., I. Thurn, Berlin, 1973, pp.231-232; Zonaras, *Epitomae Historiarum*, vol. 3, ed. Th. Büttner-Wobst, Bonn, 1897, p.479.
 17. Constantine Porphyrogenetus, *Narratio de Imagine Edessena*, Patrologiae cursus completus, series graeca, CXI, col. 423-454. 英訳 (I. Wilson, *The Shroud of Turin*, London, 1978, pp.272-290) には誤りが散見される。
 18. Patlagean, op. cit., pp.26-28; Balicka-Witakowska, op. cit., p.112.
 19. 『殉教者暦』 (*Synaxarium Ecclesiae Constantinopolitanae*, ed., H. Delehaye, Bruxelles, 1902, col. 893-901.) と『聖像物語』の類似性の理由について定説はない。グレゴリオス『説教』のテキスト・訳注はA.-M. Dubarle, "L'Homélie de Grégoire le Référendaire pour la réception de l'image d'Édesse," *Revue d'Études Byzantines*, 55 (1997), pp.5-51.
 20. *Narratio*, col.449-452.
 21. *Synaxarium*, col.900-901
 22. *Narratio*, col.444-445 (Wilson, op. cit., p.285は「ロmanos」を「ローマ皇帝」と誤訳している); *Synaxarium*, col.899. ただし、『聖像物語』はロmanos1世の要求がエデッサ市民に拒否されたと述べている。
 23. A. Markopoulos, "Constantine the Great in Macedonian Historiography: Models and Approaches," in P. Magdalino (ed.), *New Constantines: The Rhythm of Imperial Renewal in Byzantium, 4th-13th Centuries*, St. Andrews, pp.159-170; G. Dagron, *Emperor and Priest: The Imperial Office in Byzantium*, Cambridge, 2003, pp.192-201.
 24. P. Grierson, "Tombs and Obits of the Byzantine Emperors (337-1042)," *Dumbarton Oaks Papers*, 16 (1962), pp.1-63.
 25. R. Janin, *Le Géographie ecclésiastique de l'Empire byzantin, I: Le siège de Constantinople et le patriarcat oecuménique, 3: Les églises et les monastères*, 2nd ed., Paris, 1969, pp.232-236; I. Kalavrezou, "Helping Hands for the Empire," in H. Maguire (ed.), *Byzantine Court*

- Culture*, Washington D. C., 1997, pp.55-57.
26. C. Striker, *The Myrelaion (Bodrum Camii) in Istanbul*, Princeton, 1981.
27. *Leon Grammatikos*, pp.323-324. 『ロシア原初年代記』 國本哲男他訳, 名古屋大学出版会, 1987年, 48 ~ 49ページ。
28. 『原初年代記』 49 ~ 51ページ。
29. 934年8月付の金印文書 (12世紀の写し) の署名から判断すると, 長男クリストフォロスの死後も皇帝の序列には変化がなかったようである。 *Actes de Protaton (=Archiv de l'Athos, 7)*, ed., D. Papachryssanthou, Paris, 1975, no.3. 『ロシア原初年代記』 の944年条約記事 (『原初年代記』 51ページ) でも, ロマノス1世, コンスタンティヌス7世, ステファノスの順となっている。ただし, コンスタンティヌス7世が帝位継承者に指名されたかどうかは不明である。
30. F. Dölger, *Regesten der Kaiserurkunden des oströmischen Reiches*, 5 vols., München-Berlin, no.617-619. は慈善事業の一部を928年頃のこととしている。
31. *Zonaras*, pp.478-479.
32. *Narratio*, col.449; *Synaxarium*, col.900.
33. *Leon Grammatikos*, pp.324-325; *Georgios continuatus*, pp. 916-917; *Theophanes continuatus*, pp.426, 429.
34. Runciman, "Some Remarks," p.230; W. Treadgold, *A History of Byzantine State and Society*, Stanford, 1997, p.485. これに対して, Toynbee, *op. cit.*, p.381.は息子コンスタンティヌスの子とする。
35. *Theophanes continuatus*, p.435.
36. A. E. Müller, "Das Testament des Romanos I. Lakapenos," *Byzantinische Zeitschrift*, 92 (1999), pp.68-73. 第6巻で世界年代が記されるのは, ロマノス1世以下の皇帝たちの治世冒頭記事およびコンスタンティヌス7世の死亡記事のみである。
37. *Symeon Magister*, p.752.
38. *Die Werke Liudprands von Cremona*, 3. Aufl. hrsg. J. Bekker, Hannover und Leipzig, 1915, pp.142-143.
39. *Leon Grammatikos*, p.330; *Theophanes continuatus*, pp.440-441.
40. G. Dagron, "Nés dans la pourpre," *Travaux et Mémoires*, 12 (1994), pp.105-142.
41. *Die Werke Liudprands*, pp.11-12, 88. Dagron, *Emperor and Priest*, p.201. は「コンスタンティヌス大帝はモデルから祖先となった」とまとめている。H・アルヴェレール『ビザンツ帝国の政治的イデオロギー』 尚樹啓太郎訳, 東海大学出版会, 1989年, 50 ~ 52ページも参照せよ。「神話」の完成には歴史学も与った。コンスタンティヌス7世の宮廷で編纂された『続テオファネス年代記』には, マケドニア王朝の正統性の弁明が見え隠れしている。 Cf. Markopoulos, *op. cit.*
42. *Symeon Magister*, p.750. 偽シュメオンの再編作業については井上前掲論文, 37, 61ページ。なお, ランシマンやキャメロンはこの逸話の出典を, 誤って『続テオファネス年代記』としている。
43. "Bios kai Politeia tou hosiou patros hemon Paulou tou neou tou en to Latro," T. Wiegand, *Milet. 3.1. Der Latmos*, Berlin, 1913. p.127.
44. *Narratio*, col. 448-449; 『殉教者暦』も同じ逸話を伝えている (*Synaxarium*, col.900)。
45. *Narratio*, col. 452-453.
46. *Ibid.*, col. 449.
47. *Ibid.*, col. 424-425.
48. *Ibid.*, col. 449-452. 英訳 (Wilson, *op. cit.*, p.290) は「都市 (コンスタンティノープル) の安泰」を「国家の安泰」と誤訳している。
49. *Narratio*, col. 453.
50. *Symeon Magister*, p.749.
51. *Theophanes continuatus*, pp.321-341.
52. P. Magdlino, *Constantinople médiévale: Études sur l'évolution des structures urbaines*, Paris, 1996, pp.13-16.
53. 集権化の開始については, 中谷功治「8世紀後半のビザンツ帝国——エイレーネー政権の性格をめぐる——」『西洋史学』 174号, 1994年, 36 ~ 53ページ。コンスタンティノープルの衰退と再発展については, 井上浩一「都市コンスタンティノープル」『岩波講座世界歴史』 第7巻, 1998年, 109 ~ 130ページ。
54. *Leonis Diaconi Caloensis Historiae*, ed., C. B.

- Hase, Bonn, 1828, pp.70-71. 『スキュリツェス年代記』はヒエラポリスで入手したと伝える (*Ioannis Scylitzae Synopsis Historiarum*, p.271.)。
55. *Ioannis Scylitzae Synopsis Historiarum*, p.387.
56. *Ibid.*, p.394. (ダラセノスとの誓約), *ibid.*, p.400. (雨乞い)
57. B. Pentcheva, “The Supernatural Defender of Constantinople: The Virgin or Her Icons?,” *Byzantine and Modern Greek Studies*, 26 (2002), pp.2-41.
58. *Leonis Diaconi Caloensis Historiae*, p.158. 『スキュリツェス年代記』は聖母のイコンを「都市の守護者」と呼んでいる。*Ioannis Scylitzae Synopsis Historiarum*, p.310.
59. Weitzmann, *op. cit.*, p.184.
60. さしあたり Baliscka-Witakowska, *op.cit.*, pp.113-121.を参照せよ。
61. Runciman, “Remarks,” pp.250-251.

Constantinople and Relics: The *Adventus* Ceremony of the Image of Edessa in 944

Koichi INOUE

In August 944 the Holy Face of Edessa, one of the most important relics in the Christian world, was brought into Constantinople as the fruits of Romanus I's campaign against the Muslims in Syria. The *adventus* ceremony of the holy image was performed solemnly so that it might miraculously heal the old Emperor of his illness. Romanus I, a usurper, also hoped that the relics would purify his usurpation of the crown from Constantine VII of the Macedonian dynasty.

In December 944, however, Romanus was forced to abdicate and brought into a monastery. Returning to the throne, Constantine VII used the holy image as a demonstration of his legitimacy. Under his direction the court intellectuals rewrote the history of the acquisition and the *adventus* ceremony of the holy image: they insisted that the image celebrated Constantine VII.

On the other hand, they repeatedly emphasized the image's protection of the city of Constantinople as well. The special emphasis on the Capital City formed a part of the Macedonian dynastic propaganda that the dynasty was related to Constantine the Great, the founder of Constantinople. The Image of Edessa was hence closely involved in the dynastic politics of the Byzantine Empire as a *palladium* of Constantinople.

Keywords : Constantinople, Byzantine Empire, relics, Image of Edessa, dynasty